



再出発した旧大社駅



たくさんの生徒がお世話になりました



編集・発行

島根県立大社高等学校内

いなさ会事務局

電話 (0853) 53 5039番

郵便振替口座 01310-5-18808

人口減少時代・ 若い力が 未来を創る



いなさ会会長

青木 一彦

夏本番を迎え、いなさ会会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。今年の夏は、早い時期から厳しい暑さが予想されており、最高気温四〇度以上の「酷暑日」には、特に注意が必要です。くれぐれもご自愛ください。

さて、我が母校大社高校では、野球部の大活躍に続き、昨年末にはサッカー部が四年ぶりとなる全国大会出場を果たしました。文化面でも、島根県高等学校音楽コンクール・声楽の部で、田中廉三君が県代表に選出されるなど、生徒の皆さんの活躍を嬉しく誇らしく感じています。私も昨年末、大宮にサッカー部の応援に行きました。凜とした冬の青空の下、仲間とともに声を上げて校歌

を歌い、選手に声援を送るあの時間は、何物にも代えがたいものでした。生徒の皆さんの頑張りはもちろんのこと、こうした生徒一人ひとりの成長を支えていただいている先生方のご努力に、深く感謝いたします。また、社高を巣立った卒業生の皆様には、新たな世界での活躍を大いに期待し、心からエールを送ります。

さて、生徒の活躍に目を見張る一方で、我が国においては、「静かな有事」とも言うべき「少子化・人口減少」が進行しています。特に地方においてはその進行が早く、その要因は、進学や就職を理由とした都市部への人口集中や出生率の低下などが挙げられています。国・政府としても、こうした状況を取りこぼさるべく、人口減少を「日本最大の課題」と位置付けて、「人口戦略本部」を設置し、少子化対策や社会保障改革、外国人政策などの取り組みを最優先課題として進めてまいりました。

今も昔も「子どもは社会の宝」。将来を担う若い人たちが、幸せを感じながら地域で生き活きと暮らし、故郷を受け継ぎ、そして守っていくためにはどうすれば良いか。この人口減少問題は、国民一人ひとりがあらゆる知恵を絞りながら克服すべき大きな課題です。私も国政の場で、

この難題に正面から向き合い、地方選出の国会議員として引き続き全力を注いでいく覚悟です。これからもご協力の程、よろしくお願いいたします。



狙って出来る事ではないが、狙わねば 出来ない事である

第46代 校長

伊藤 尚史

今春の人事異動により校長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

いなさ会のみなさまにおかれましては、平素より本校の教育活動に深いご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

本校はこれまで、スポーツに関わる専門的資質や能力を備え、島根のスポーツ界を担う人材を数多く輩出してきました。その歴史を語るうえで忘れることのできない出来事の一つが、平成十四年のインターハイにおける陸上競技部男子の全国総合優勝です。並み居る強豪校を相手に成し遂げられた快挙は、本校の誇りとして今なお鮮やかに記憶されています。

校門を入ってすぐ左手、グラウンドへ向かう階段の傍らには、この偉業を称える記念碑が静かに佇んでいます。

す。そこには「本校陸上競技部男子は平成十四年県総体、中国大会において総合優勝の栄に輝き、続いて茨城・ひたちなか市笠松運動公園での全国大会に出場、見事全国総合優勝の偉業を成し遂げた。茲にその栄誉を碑に刻して称え、永く後世に伝えるものである」と当時の栄光が刻まれ、訪れる者に先輩方の努力と栄誉を静かに語りかけています。

当時の監督が残した「狙って出来る事ではないが、狙わねば出来ない事である」という言葉は、単なる勝利の標語ではなく、日々の鍛錬に裏打ちされた確固たる信念を示すものです。高い目標を掲げ、その実現に向けて一人ひとりが責任を持ち努力を積み重ねたからこそ、この偉業は達成されたのだと考えます。

令和の時代を生きる生徒たちにも、この精神をぜひ受け継いでほしいと願っています。目標は高いほど達成は容易ではありません。しかし、初めから不可能と決めつけてしまえば、その可能性すら閉ざされてしまいます。まずは志を高く掲げ、「狙う」こと、そしてその志にふさわしい努力を重ねることが何より大切だと考えます。

記念碑の前を通るたびに先輩方の偉業に思いを馳せ、自らの目標を見つめ直す。その積み重ねが、やがて新たな歴史を創り出す原動力になるものと信じています。志を高く持ち挑戦を続ける生徒が数多く育つことを願っています。

いなさ会のみなさまにおかれましては、今後とも母校のさらなる発展のため、後輩たちの志ある挑戦に温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年度 いなさ会総会

「いなさ会総会」は今年も八月十三日（木）に左記の要領で開催されます。お誘いあわせの上、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

なお、懇親会会場の島根ワイナリーへの移動は総会の終了後、有朋館前より連絡バスにて行い、会の運営は卒業三十周年を迎えられた高校48期の皆様にお世話いただくことになりました。先輩後輩の皆様共々、久しぶりの再会を喜び合い、楽しい歓談のひと時をお過ごしください。

総会

日時 令和8年8月13日（木）
午前10時～12時20分
会場 大社高校有朋館大研修室

次第

- (1) 開会の辞
いなさ会物故者・恩師へ黙祷
- (2) 会長挨拶
- (3) 校長挨拶
- (4) 議事
- (5) 令和7年度会務報告、決算報告、監査報告
- (6) 令和8年度会務計画・予算審議
- (7) 会報「いなさかい」について
- (8) 周年記念品贈呈、代表挨拶
- (9) 40周年 高校38期
- (10) 30周年 高校48期
- (11) 20周年 高校58期
- (12) 記念講演
講師…前田 貴氏（高校38期）
演題…「島根県の創業実態とスタートアップ支援への取り組みについて」
- (13) 閉会の辞

懇親会

*総会終了後バスにて移動
時刻 午後1時～3時30分
会場 島根ワイナリー

次第

- (1) 開会の挨拶
- (2) 会長挨拶
- (3) 幹事長挨拶（高校48期）
- (4) 乾杯
- (5) 懇親会
- (6) 来年への引継式（高校38期代表者から39期代表者へ）
- (7) 万歳三唱（高校39期代表）
- (8) 閉会の挨拶



●講師紹介●
まえ だ たかし 氏
(高校38期)

演題 「島根県の創業実態と
スタートアップ支援への
取り組みについて」

【プロフィール】

同志社大学文学部卒業後、日商岩井（現：双日）、豊田通商、ミスミ等を経て、令和4年に島根県へUターン。（公財）しまね産業振興財団のインキュベーションマネージャーとして島根県内の創業支援、中小企業基盤整備機構の経営支援アドバイザーとして中小企業のハンズオン支援に携わっている。

令和7年度 いなさ会総会報告

令和七年度いなさ会総会は例年の通り八月十三日（水）十時から有朋館大研修室で開催されました。

今年は任期三年の役員改選の年にあたりますが、和田節子さん（高校17期）が新たに顧問に就任されたほかは、青木一彦会長、北島建孝最高顧問ほか七名の顧問、六名の副会長、二名の監事の皆様には引き続き役員をお引き受けいただくことになりました。

議事の中で、いなさ会館玄関等の改修への対応が審議されました。現在、いなさ会の歴史的資料の展示・保管場所と同時に吹奏学部の活動場所として使用されている同会館ですが、明治三十五年に鹿城が丘の

地に県立第三中学校の講堂として建設されたものです。（玄関は昭和五十五年の浜山移転に際し、県立第三中学校の校舎の玄関を復元したものです。）平成八年には文化庁の登録有形文化財として登録されていますが、特に玄関の数か所に崩壊や雨漏りしている箇所があり、改修が必要な状態になっています。

その対応については、経費面等の課題が多く、また文化庁、県、市との協議も必要であり、役員に一任することとなりました。

記念品料贈呈は、四十周年の高校37期、三十周年の高校47期、二十年の高校57期の皆様からで、それぞれの代表者によるご挨拶があり、会長から謝辞が述べられました。

記念講演は「絵図・文献でたどる大社の町並みと特色」と題して、県立古代出雲歴史博物館学芸員の岡宏三さん（高校37期）によって行われました。岡さんの専門は近世社会文化史で数多くの論文を書かれていますが、地元の大社では例えば「今さら聞けない出雲大社の歴史」など、地域の歴史を分かりやすく楽しくお話される講師として知られている方です。

今回は、大社（杵築）は「全国で唯一中世（鎌倉期）以降のほぼ同一地域の景観の変遷を絵図でたどることができる地域」であるとして、鎌倉末期（14世紀初頭）に描かれた

「出雲大社并神郷図」（千家家）から、江戸時代の絵図二点、明治時代の絵図二点、昭和11年に米軍機が写したといわれる「大社航空写真」（出雲市）まで六枚の絵図を紹介されました。

絵図はただの絵のようですが、有力な歴史資料として重要であり、これらの絵図から、描かれた当時の大社の景観や町並みがどのようなものであったのかを知ることができるとして、実例を具体的に示して解説いただきました。

実に興味深いお話で、講演にあたって示された図の全てが本校のホームページ「令和7年度いなさ会総会」にアップされていますのでぜひご覧ください。

ご案内

いなさ会ホームページ

大社高校のホームページの中にいなさ会のページがあり、各種ご報告やご案内をしていますのでご覧ください。アドレスは
<https://www.taishaed.jp/>です。

支部総会、同期会などのご案内もします。ご利用希望の方はいなさ会事務局までメールでご連絡ください。
taisha-inasa@gaeaocn.ne.jpです。

住所変更

本紙を正確にお届けするため、住所等に変更がございましたらいなさ会事務局までご連絡いただきますようお願いいたします。

大社高校いなさ会事務局

〒699-0722

出雲市大社町北荒木1473

電話 0853-5315039

(平日10時～15時)

FAX 0853-5312244

E-mail taisha-inasa@gaeaocn.ne.jp



思い出の白い帽子の女性と甲子園出場メンバー

周年記念に 寄せて

卒業40周年

38期生 板垣 悟史
(昭和60年度 野球部主将)

「白い帽子」の 奇跡

奇跡

私たち38期生にとって、昭和六十年の夏は今も鮮烈な色彩を放っています。二十二年ぶりに掴み取った夏の甲子園。開会式直後の第一試合で北海道代表の旭川竜谷高校と延長一〇回の

激闘の末に惜敗。ベンチ前で砂をかき集めた悔しさは、私たちの青春そのものでした。

それから三十九年の月日が流れ、止まっていた時計の針が再び動き出しました。母校・大社高校が「令和の快進撃」でベスト8に進出。強豪校を次々と撃破する後輩たちの姿にあふれる涙を止めることができませんでした。そんな折、私の元に一通のメッセージが届きました。

「あの時の帽子を持って、甲子園でお会いしたい」

送り主は、昭和六十年の開会式で大社高校のプラカードを掲げ、私たちの先頭を歩いてくれた女性でした。あの日、敗戦後の宿舎を訪ねてくれた彼女の真っ白な帽子に、私たちは精一杯の寄せ書きを綴りました。彼女は、その帽子を四十年もの間、かけがえのない宝物として大切に守り続けてくれていたのです。

令和の空の下、奇跡の再会が果たされました。手渡されたのは、少し色あせながらも、当時の熱量を宿した力強い筆跡の帽子。それを見た瞬間、私たちの止まっていた「昭和の夏」が、四十年の時を超えてようやく報われたような気がしました。

一人の女性がずっと抱き続けてくれた「甲子園で再会したい」という思いが、再び私たちを聖地へと呼び戻してくれたのです。この奇跡的な再会は、勝敗を超えた高校野球の素晴らしさと、「大社高校」という絆が生んだ、何ものにも代えがたい一生の宝物です。

卒業30周年

48期生 浅津 伸行

卒業30周年を 迎えて

十年前、卒業20周年の同窓会を開催し、多くの同級生と再会できました。

普段から会えている人もいれば、二十年振りに会えた方もいて、クラス、部活動の仲間との会話に盛り上がりました。当初予定していた時間では足りないくらい卒業してからの時間を埋める素敵な機会でした。

あれから十年が経ち、今年30周年期として、再度、同窓会を企画しております。

十年振りに同級生と会える、前回参加できなかった方が来て

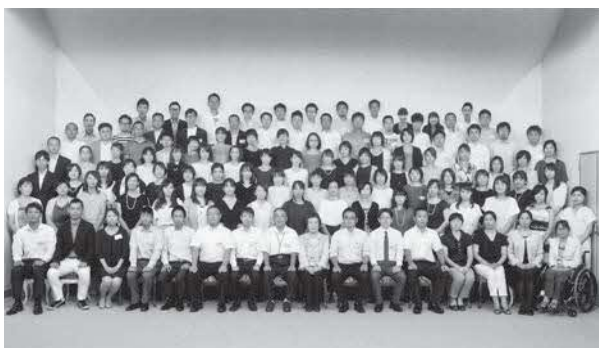
くれることになると三十年振りに会えるかもしれないと思うと、今から楽しみです。

「大社高校いなさ会」卒業するまであまり認識していなかったですが、この十年に一回の周年期を設定してくださっていることで、同窓会を開催することができ、このことは、我々卒業生にとって本当に有難い機会を頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

四十八歳という人生折り返し地点を迎える我々48期ですが、人生がさらに面白くなってきた年齢だと思っています。その中で同級生という存在は、高校三年間という貴重な時期に大社高校という同じ校舎で同じ時を過ごした仲間であり、人生に彩りを加えてくれる方々です。

そして、いなさ会を通じて、先輩、後輩の皆様と卒業後も繋

がりを感じれる会があることも大社高校を卒業できて良かったなと改めて思っております。



卒業20周年記念同窓会

を取り入れた授業づくりが当たり前になってきました。私自身、GIGAスクール構想が本格的に進み始めた時期には、ICT活用を担当する分掌部長として、児童生徒や教職員のICT活用を進める業務に携わりました。端末整備や活用方法の提案、研修の実施など、試行錯誤の連続ではありましたが、学校全体で新しい学びを進めることに取り組みました。現場では本当にたくさんの方々が協力してくださり、嬉しく強く感じました。現在は、改めて児童生徒一人ひとりの発達段階や実態を丁寧に捉え、その子に合った効果

的な学習や支援について学び直しながら、日々の授業づくりに取り組んでいます。子どもたちの成長に力をもらいながら、私自身も成長を続けていきたいと思っています。学校での子どもたち、先生方との出会いに日々感謝しています。

「令和七年度いなさ会周年記念寄付金」につきまして、高校37期、47期、57期の皆様より多額のご寄付を賜りました。厚くお礼申し上げます。

寄付金は有朋館の管理費、弓道場敷地費用等に有効に使わせていただきます。

母校のため、快くご寄付いただきました皆様にご心より感謝申し上げます。

寄付金のお礼



協賛金のお礼とお願い

例年協賛金をお送りいただき、まことにありがとうございます。

皆様のお志に厚くお礼申し上げます。

本会報は皆様方からお寄せいただいている協賛金のみを運営の資金と致しております。しかし、年々協賛金が減少しており、大変厳しい状況にあります。

本会の発展に寄与する本紙発行に、益々のご理解とご協力をお願い申し上げます。

郵便振替用紙を同封致しておりますので、一口千円から協賛金をお払い込みくださるようお願い申し上げます。

支部だより

東京いなさ会

会長 岩成進吉

(高校26期)

長年、東京いなさ会総会会場として使用していた学士会館が、建て替えの為に令和六年十二月末にて一時閉館となりました。そのため第七〇回総会は令和七年十一月二十九日に出雲大社東京分祠（港区六本木）向かいのレストランで開催しました。

総会前に希望者約六〇名が出雲大社東京分祠にてご祈禱を受け、母校と東京いなさ会の弥栄を祈念しました。

総会では学校長吉川めぐみ先生に母校の様子を、いなさ会会長の青木一彦様に出席地域の様子等紹介いただきました。母校が第一〇四回全国高校サッカー選手権大会への出場が決まり、蹴友会（サッカー部OB会）の福岡嵩夫会長他二名が応援依頼の為、出雲から参加いただきました。サッカー選手権の長岡帝京高校との初戦は令和七年十二月二十九日氷川神社（さいたま市大宮）に隣接するNACK5スタジアム大宮会場で行われ、



第70回東京いなさ会総会

中部いなさ会

会長 草谷八郎

(高校13期)

昨年の中部いなさ会総会は、いなさ会から北島建孝最高顧問、板倉泰子副会長、大社高校から吉川めぐみ校長、をお迎えし開催しました。

和やかな雰囲気でご来賓のご挨拶、校長先生からの後輩達の活躍の話を伺い、食事の頃には、ご来賓と会員の会話に懐かしい言葉が聞こえました。中部いなさ会には、出雲弁の達者な方がみえまして、「ばんじまして」で始まる長文の物語を朗読していただき、懐かしいやら可笑しいやらで、喝采を得ました。お陰でとても楽しい会になりました。

●連絡先 事務局 藤本 祥 (高校43期) 電話 〇九〇ー四五三五ー六〇〇八

近畿いなさ会

会長 泊吉実

(高校28期)

昨年の総会は、講師が自作の歌をギターの弾き語りで披露するという、斬新な趣向に拍手がわきました。出席の六〇人あまりの皆さまに大いに楽しんでいただけたと思います。

講師はデイリースポーツ写真部記者の開出牧さん。37期の野球部員で、三年春のセンバツに出場しベスト8入りしましたが、夏は県大会準決勝で敗れています。講演では、一昨年の夏、大社旋風を巻き起こした後輩たち



熱唱する開出牧さん（2025年11月16日）

の迫真のプレーを捉えた写真を映し出しながら、後輩と甲子園に対する熱い思いを語りました。続いて弾き語りです。題名は



ハイ ハートマーク♥

できました。今後とも懐かしさと楽しさを分かち合える中部いなさ会の発展にお力添え戴きますようお願い致します。

なお、令和八年度中部いなさ会総会は、会場、日時ともに、決定次第ご連絡いたします。多数のご参加をお待ちしております。

京滋いなさ会

会長 多々納裕一

(高校32期)

令和八年四月十八日に、大学生十代から八十代までの二十一名にご参加いただき、第四十六回総会、懇親会を開催しました。

青木一彦会長の挨拶を板倉泰子副会長にご代読いただき、故郷に思いを馳せました。伊藤尚史校長にご挨拶いただき、最近の母校の状況について



京滋いなさ会集合写真

詳しく教えていただきました。母校の生徒さんの活躍を聞き、大変うれしく思いました。近畿いなさ会の泊吉実会長にもご祝辞と近況をお話いただきました。近畿いなさ会、近畿大社会などとも連携して、近畿地区の同窓会を盛り立てていきたいと思つた次第です。そして、恒例の近況報告タイム、参加いただいたすべての皆様からスピーチいただき、大変盛り上がりしました。最後に、校歌・応援歌を歌つて閉会となりましたが、アットホームな雰囲気の中、大変楽しいひと時をともに過ごさせていただきました。ご参加いただいた皆様どうもありがとうございました。

京滋いなさ会は、新しくいなさ会の会員になられた卒業生の「新人歓迎会」を兼ねて、例年四月に開催しています。お昼の開催で、学生さんの参加費は無料です。第四十七回京滋いなさ会は令和九年四月十七日（土）に開催いたします。新しく近畿地方に來られる卒業生の皆様をはじめ、皆様のご参加をお待ちしております。

米子いなさ会

会長代行 北井勇作

(高校34期)



笑いヨガの効果で、みなさん抜群の笑顔となりました(笑)

第六十一回米子いなさ会は令和七年六月二十八日に開催され、大社からお越しの三名を含む十八名が集いました。参加した会員は17期以上が七名、34期以下が初参加一名を含む八名となり、平均年齢が少し若返りました。今後も口コミを活用して参加を募りたいと思います。

総会では石部会長の挨拶に続き、小倉教頭による青木会長のメッセージ代読、吉川校長から近況が報告されました。特にベスト8に進出した甲子園での裏話には全員が熱心に聞き入りました。講演会では oba to meiさんを講師にお迎えし、「笑いヨガ」を体験。obaさんが大社高校出身で親近感が増し、全員が一体となってお腹を抱えて笑い転げました。その後の懇親会では参加者全員のスピーチで交流を深め、校歌と応援歌、「ふるさと」を斉唱。最後は恒例の「フレフレ大社！」のエールで

締めくくりました。

毎年、参加された皆さんに楽しんでいただけるよう趣向を凝らしています。近隣の大社高校卒業生の皆さん、ぜひ参加してみてください。新しい出会いと楽しみが増えること請け合いです！

●連絡先 事務局 北井勇作
(高校34期) 電話(〇八五九)三七一二三七八

松江いなさ会

会長 江口博晴

(高校10期)

なんとといっても最大の出来事は朝ドラ「ばけけ」放送の七割は松江が舞台でしたから全国から数多のお客様が来てくださいました。小泉八雲・セツ夫妻の心を温かく包んだこの街に住むことを誇らしく思いました。放送後も松江では「ばけけ」熱が続いています。全国のいなさ会の皆様、松江は趣のある良い街です。ぜひお越しください。



懐かしい楽しい時間を過ごしました

お待ちしております。

今年も会報「松江いなさ」を発行しました。いなさ会ホームページに掲載しています。大社高校いなさ会へお知らせと進んでもらうとご覧になれます。昨年の会報に寄稿していただいた島根大学の宮澤文雄氏に今年の総会記念講演では話してもらいました。

●連絡先 事務局 糸賀耕一
(高校19期) 電話(〇八五二)二四一五一九四

広島いなさ会

会長 曾田俊二

(高校27期)

第二十三回広島いなさ会総会を昨年九月七日、板倉泰子副会長、吉川めぐみ校長をお迎えし開催しました。また、今回初めてオブ参加で「ひろしま出雲会」(旧出雲市、大社、湖陵、多伎町出身者)から事務局長が参加され大変盛り上がった総会となりました。

板倉泰子副会長から青木会長の御祝辞と「37期と若輩であるがこれから頑張っていきたい」とご挨拶をいただきました。

昨年に続き吉川校長先生からは「各クラブが素晴らしい活躍の時期に着任し、素晴らしい校風の中で勤務している縁を感じ誇りに思っている。」とご挨拶をいただきました。ご講演もお願いし「縁(えにし)に導かれて」と題して、ご自身の生い立ちから勤務校での活躍、そして着任後「夢・努力・感謝」が込められているだれかをみんなで応援できる学校」と社高で感じられた思いまでユーモアたっぷりに先生の教育観を感じることができたお話をいただきました。

ら勤務校での活躍、そして着任後「夢・努力・感謝」が込められているだれかをみんなで応援できる学校」と社高で感じられた思いまでユーモアたっぷりに先生の教育観を感じることができたお話をいただきました。

●連絡先 事務局 岸 利一
(高校30期) 電話(〇八二二)二三一五六〇四



旧中、高女、高校と3校歌斉唱の様子

県庁いなさ会

会長 藤間 潤

(高校37期)

県庁いなさ会は、島根県庁に勤務する卒業生で組織していますが、昨年は、十月三十日に松江市のサンラポーむらくもで年一回の総会と懇親会を執り行いました。会員のほか、OBを中心とした顧問の方々や、吉川校



総会に参加されたみなさん。
大社クイズ、校歌、応援歌の合唱で大いに親交を深めました。



2年ぶりの再会

斐川いなさ会

会長 山崎文夫

(高校20期)

斐川いなさ会は、令和七年十一月二十九日に斐川の華満斐川本店で三〇人が出席し開催しました。

会では山崎文夫斐川いなさ会長の挨拶の後、いなさ会本部より和田晶夫いなさ会副会長にご挨拶いただき、次いで小倉庸二教頭先生より学校の現況報告がありました。その後懇親会に入り、和やかな雰囲気の中、大変盛り上がった会となりました。特にサッカー部の全国大会での大社旋風を期待する声が上がっていました。最後は応援歌、校歌斉唱で高校時代に帰って出席者全員が心を一つにしました。

当会も担い手の減少に頭を悩ませています。今後も親睦活動や母校の支援活動を継続していきたいと思えますので、母校には、県職員となつて入会してくれる人材を育てていただくよう何卒よろしくお願いいたします。

●連絡先 事務局 余村久美子
(高校49期) 電話(〇八五二)二二一六五五四

●連絡先 事務局 陰山健二
(高校34期) 電話 〇九〇一八八九〇一二〇六九

会員だより



亡き母・

愛子の遺稿に寄せて

今岡 克己氏(高校24期)

令和七年九月十九日未明、母・今岡愛子は九十六歳の天寿を全うし、永眠いたしました。母は書をこよなく愛し、大社町美術展などで長く役員を務めさせていただきました。大社町の習字教室で母を慕ってくださった多くの皆様、そして神道婦人会や「いなさ会」の皆様に、生前は多大なるご厚情とご愛顧を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

会をいただきました。母も天国で何よりの喜びを感じていることと存じます。

振り返れば、晩年まで母が健やかに過ごせたのは、旧制女学校時代の四年間、ふるさと大社町宇龍から七キロもの山道を越えて通学し、鍛え抜かれた足腰があつたからこそでしょう。戦時下の学徒動員により十分な勉学の時間は得られなかったはずですが、教室の最後列である「壁付」の級長席をずっと守り抜いたことは、母の生涯の誇りでした。家から持参した粗末なお弁当を、空腹に耐えかねて授業の合間に少しずつ口にし、昼時には空っぽになっていた……そんな学生時代の思い出を、母はよく語っておりました。



在りし日の今岡愛子

八十年という歲月を経てもなお、母の心に深く刻まれ続けた記憶であつたようです。この度、いなさ会事務局のご厚意により、本誌に掲載の機

今頃は天国で旧友たちと再会し、当時を懐かしんで笑い合っていることでしょう。母の記憶の断片を、同窓生の皆様と分かち合えましたら幸いです。

わたしとピコリーノ

山根 以久子氏(高校26期)



ピコリーノ

二〇〇二年七月に父が急逝。そこから私の思いもかけなかった第三の人生が始まります。当時、私の父は㈱サンポールという旗のポールと車止めのメーカーを経営していました。私はと言えば、大学を卒業するとすぐに結婚、専業主婦の生活を謳歌していました。突然に主軸を失った会社は混乱し、誰も責任を取れきれず、四年後の二〇〇六年、とうとう私にサンポール社長の話が回つ

てきました。なんの社会的経験も無く、経営のいろはも知らない私です。「座っておけばいいから」と説得され就任はしてものの、周りは皆この人に本当に社長が務まるのだろうかと不安だったことでしょう。弊社の製品の中にピコリーノという小鳥が四羽乗った車止めがあります。創業間もないころに開発された製品群の中で、硬いイメージの製品群の中で、唯一夢を感じさせるピコリーノ。これは期せずして

会社を任された私への先代からの置土産になりました。私が会社に入つたころは、リーマンショックの煽りを受けて世の中の景気は低迷、会社の売上も下降状態でした。でも頑張れたのは、このピコリーノにかけた先代の想いと全力で支えてくれた社員たちのおかげです。

その後、世の中の景気は回復。二〇一四年には新工場建設も実現。二〇二二年、父の悲願であつた売上五十億を達成、無事に息子に引継ぐことができました。以前の私を知っている人は皆、今の状況を信じられないと言います。人前で自分の意見を述べるなどとてもできる人ではなかったからです。でも人は場を与えられると変わるものだとつくづく思います。神様がそれまでの私を見て「自分が持つて生まれた能力は全部使い切つてから死になさい」と思われたのでしょうか。社長という立場になったからには殻に閉じ籠つてはいられません。自分の理想の会社にしていくために方針をはっきりと打ち出し、みんながそれに従って動いてくれる状態を作り上げなければなりません。最初は大変でしたが、振り返ってみればとても嬉しい十六年間でした。ところでこのピコリーノ、出雲大社にも設置されているのをご存知ですか。手水舎の近くに一基、そして駐車場の入口に二基あります。もう一つ、昨年の関西万博で西と東のゲートではためいた万国旗、それを支えていたポールはすべて弊社の製品でした。他にもサンポール製品は街のあちこちにさりげなく設置されています。ぜひ探してみてください。

旧大社駅の再出発！

吾郷

誠氏（高校49期）

山陰本線の出雲地方までの延伸にともない、出雲今市駅と大社の町を結ぶ大社線が明治四十五年（一九一二）六月に開通しました。大社線の終着駅として開業した大社駅は、平成二年（一九九〇）三月の大社線廃

止に至る七十八年間、出雲大社参詣の表玄関として、また地域の産業、経済の基盤として機能しました。現在の駅舎は、大正十三年（一九二四）に竣工した二代目の駅舎です。大正期に入ると山陰

本線の石見地方への延長、瀬戸内と結ぶ山口線との接続などにより、大社駅の乗降客は大幅に増加しました。それに伴い手狭となった初代駅舎を解体し、大規模に建て替えられました。

大社駅は、出雲大社参詣の表玄関として和風デザインでまとめられた特徴ある鉄道駅舎です。変化に富んだ屋根を持ち、木造の柱や漆喰壁、窓が織りなす外観は、左右対称の厳格な構成の中にも華やかさを演出しています。優れた意匠の木造和風鉄道駅舎としてわが国を代表する建築であり、わが国鉄道興隆期の地方駅舎の姿をよく留めている数少ない建物であることから、平成十六年（二〇〇四）七月に「旧大社駅本屋」として重要

文化財に指定されました。現在、重要文化財の指定を受けた駅舎は、旧大社駅本屋、東京駅丸の内本屋（一九一四年、東京都）、門司港駅本屋（一九一四年、福岡県）の三棟しかありません。

一方で、永年の風雪に耐えた木造建築は、雨漏りなどの老朽化が進むとともに、耐震対策の必要性が確認されたため、令和二（二〇二〇）年度（令和七（二〇二五）年度）にかけて保存修理事業を立ち上げ、五年の歳月をかけて大規模な修理工事を進め、令和七年十二月に完成、令和八年四月十五日にリニューアルオープンしました。

かつて、大社高校への通学で毎日のように大社駅を利用された方もおられるのではないのでしょうか。部活動などで全国大会出場となると、駅前で壮行式も行われました。野球部が全国大会に出場した際は、大社駅発の臨時団体列車が運行され、大勢の応援団が阪神甲子園球場に向かった時代もありました。

大社駅は、一人ひとりの大切な思い出とともにある建物です。進学や就職、初詣、修学旅行や新婚旅行、戦時中の出征など、人生のそれぞれの場面で、たくさんの人々が駅を通過していききました。

未来へ向かって再出発した旧大社駅が、今後も地域の宝として、百年後も二百年後も皆様に愛され続ける建物となることを願っています。

原点から未来へ

来間 弘樹氏（高校66期）

昨年度でアスリート生活に一区切りをつけ、島根に戻って教員として働き始めました。競技者としては、日本選手権優勝や準優勝など貴重な経験をさせていただきました。三十歳という節目を迎え、結婚という人生の大きな転機も重なったことで、これまで競技を通して得た経験を島根に還元したいという思いが強くなり、地元へ戻ることを決めました。

大社高校時代は、良きライバルに恵まれ、日々切磋琢磨しながら

から競技に取り組んでいました。記録や成績では常に前を行く存在がいたため、「どうすれば追いつき、追い越せるのか」を考え続けながら練習に励んでいました。また、先生や仲間を支えられた環境は、今でも私の大きな財産です。足の速くない自分が強くなるために、競技日誌をつけながら試行錯誤を重ねた経験が、現在の土台になっています。高校時代に身につけた「自ら考え、継続する力」は、その後の競技人生においても大きな支えとなりました。

大学以降、トップレベルで競技を続けることができた要因は、自分の弱みと向き合い続けたことです。高校時代まで苦手意識のあった走りに真正面から取り組み、課題から逃げずに努力を続けたことが競技力向上に繋がりました。



日本選手権優勝時の写真（2020年）

また、実業団では競技と仕事の両立に苦労することもありました。競技中心だった学生時代とは異なり、仕事もある中で練習時間や体力の確保にも工夫が必要でした。限られた時間の中で結果を求められる環境は決して容易ではありませんでしたが、その経験を通して、目的を明確にして取り組むことの大切さを学びました。日本選手権優勝、準優勝時を振り返ると、どちらも時間を有効に使い、一回一回の練習に高い集中力を持って取り組んでいた時期でした。

現在は教員として新たなスタートを切りました。競技を通して学んだ挑戦する姿勢や、課題と向き合い続けることの大切さを、これからは子どもたちへ伝えていきたいと考えています。

自分の経験が誰かの成長や挑戦する勇気につながるよう、一人ひとりと真摯に向き合いながら、島根に貢献できる指導者を目指していきたいと思っています。

来間弘樹さんの紹介

筆者は日本を代表する棒高跳選手のひとつ。主な競技成績は、二〇一三年大社高校三年生で全国高校総体棒高跳七位、二〇一七年順天堂大学四年生の日本選手権で六位、二〇一八年に実業団ストライダーズに入社し二〇二〇年の日本選手権大会で優勝、二〇二六年に帰郷し、アジア跳躍選手権で三位に入賞など。

今、
母校は…

$$\begin{array}{rcl} \text{(余剰金)} & \text{(支出総額)} & \text{(残 金)} \\ 77,980,000\text{円} & - & 66,200,000\text{円} = 11,780,000\text{円} \end{array}$$